

私を形成してゐる因子に、はつきり影響をあたへたのは

金沢以外にはないといへやう。

(永瀬清子「遠い日(一)」『北國新聞』一九三六年八月六日より)



英和幼稚園卒業式

後列左から5人目永瀬清子、内藤徳先生
中列左から6人目ジョンストン園長先生

私の通った金沢の英和幼稚園は、ミッションスクールの北陸女学校の付属幼稚園だったので、カナダ人の優しいミス・ジョンストン先生が園長であった。先生は他の外人の先生たちと一緒にすこし離れた女学校の一隅の建物に住んでいらして、窓にはきれいな白いレースのカーテンが見えていた。まだ明治四十年代だったので、「大草原の小さな家」のインガルス夫人みたいなロングスカート姿であり、古い文化の城下町である金沢だったが、ハイカラなキリスト教文化を少しずつ受け入れていた。

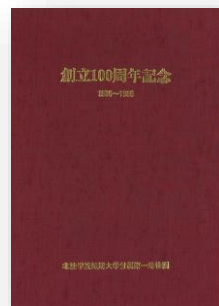
永瀬清子「幼かりし日々」『すぎ去ればすてなつかしい日々』福武書店 一九九〇年六月)



北陸学院幼稚園発祥の地 石碑
(金沢ふるさと偉人館内)
1981(昭和56)年10月

私はもう年をとりましたが、長らく詩を書いていきます。しかしふしぎな事に幼かった時に聴いたり読んだりしたものが、いまも心の隅に新しく生きていくような気がする事が多いのです。現実の事や近頃知った事はもう大変忘れっぽいのに――。
ですから幼年から老年は、次第に遠ざかる一筋道ではなく、まるで首尾のつながった輪のようなものに思われ、幼年はすぐ私のそばにあります。云いかえればフットライトに照らされている舞台のように、幼年がいつも私を照らしているとも云えるでしょう。

(永瀬清子「幼年はすぐそばに」『月刊こどもの季節』第二巻第四号 一九七九年七月より)



北陸学院幼稚園創立100周年記念写真集
編集委員会編『創立100周年記念誌』(学校法人北陸学院 1986年10月)

また、さきごろ古い卒園写真がひょくり見つけたが、中央に腰かけているジョンストン先生は、片手を私のうしろにまわし、そと抱いて下さっているのがあった。

永瀬清子「幼かりし日々」『すぎ去ればすてなつかしい日々』福武書店 一九九〇年六月)